

紫式部集と紫式部日記

—— 成立論からみた関係 ——

上田 記子

(一)

紫式部集は大旨式部の自撰と考えられているが、最近、清水好子氏が、紫式部日記と重複する歌は、日記から後人によって増補されたとする見解を提出された^①。また、菅野美恵子氏は、清水氏の論をふまえつつ、古本系家集の日記と重複する部分の欠落が、小グループで起きているところから、「このように不自然な脱落が、しかも日記と重なる部分においてのみ起こり得るとはとうてい考えられない」と、古本系は定家本系の脱落したものとする説に不審を述べて、両系統に共通の日記所載歌と、定家本系の日記所載歌は、別の時期に収録されたものであると主張される^②。氏によれば、紫式部集は両系統に分岐する以前に一度、分岐後、定家本系で独自に一度と、二度に渡って日記から増補されているのである。紙数の都合か

ら、両氏の説を詳しく検討できないが、私はこの基本的見解、すなわち、定家本系家集が、散失したと思われる紫式部日記の寛弘五年五月五日・六日の記事によって、独自に増補されているという論には賛成したい。疑問があるのは、定家本系の独自増補の範囲であつて、

(1) 69^③ 「影みても」70 「独り居て」

(2) 115 「菊の露」→119 「うち払ふ」

の二箇所を含めるとしておられることである。

(1) 69 「影みても」は、定家本系家集の詞書の冗長さからは、その独自に増補されている歌群に含まれるようにみえるが、古本系家集にも収録されており、その詞書が定家本系のそれと相違するのである。この事態について菅野氏は、古本系の編者が独自の見解で69番を独詠歌として収録したとされるが、私は困難な推測であると思

う。なぜなら、古本系には他に、独自に増補された痕跡もみあたらないし、一步譲って、そのような推測を試みたとしても、定家本系も古本系も共にこの歌は「けふはかく」の次に位置しているのであるが、それぞれ別人である編者が各人の意志で増補して、このような一致が起きたとしなければならず、偶然すぎよう。むしろ、両系統に分岐する以前に、既に一對の贈答歌として、後述するつもりであるが、古本系の詞書を持った歌があったと思われる。そして、おそらく分岐以前の祖本に返歌が脱落することがあり、脱落の跡を残して継承されていたものを、定家本系の編者が手にして注目し、日記と対照して、家集に大量の脱落があると早合点して、日記から切り取って増補してしまったのではないかと想像する。この歌の詞書が両系統で著しく相違するのは、定家本系の編者がこの歌も原本によらず、日記によって書いてしまったからではないか。定家本系独自の増補はやや複雑な作業をしているので、このような想像も可能ではないかと思つた。

(2) 115「菊の露」～119「うち払ふ」までが、古本系にないことを以って定家本の独自増補だとするのは、次の二点の理由で避けたい。

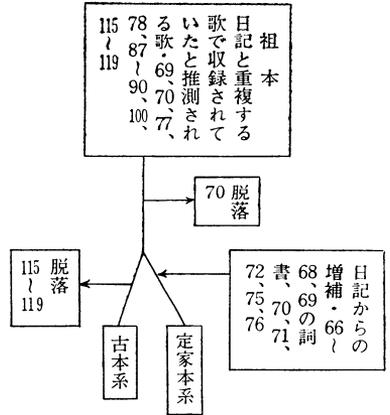
(1) 定家本系の編者が扱った紫式部日記は、「(想定される)散失部分の記述は、決して現存日記の基調を破壊するものではない。」といわれるように、現存の日記とは、たとえ書誌学的には別系統の写本

であっても、文学的には同質のものだったと思われる。日記には、道長の栄華に賛嘆の目を向ける式部と、そんな自己を疑問視して身の憂さに悩む式部とが相剋して描かれているが、家集の法華三十講の詠歌の詞書にも、「公ごとと言ひまぎらはすを」と、栄華に引かれつつも憂さを抱いているという相剋の構造がみえる。ところが115～119の詞書は、後述するが、その構造とは無関係なようにみえ、特に118の詞書は現存日記の文学性からは出てこない一文を持っている。これは115～119が法華三十講の詠歌とは質の違う資料から採られたためと思われる。

(1) 今一つの理由は、古本系一〇九番に「又いかなりしにか」の詞書を欠いており、この前の五首と連続して脱落した可能性があるということである。この五首が定家本系の独自の増補ならば、今井源衛氏が「二類本が原型で、一類本は、日記によって増補したかとの懸念も生ずるのではあるが、その場合には、……『又いかなりしにか』を、一類本が何によって記したかが分らなくなる。」といわれる通りである。

以上のような、家集の日記と重複する歌と日記との関係を、歌の番号によって確認すると、次の頁のような図になる。

私が本稿で問題としたいのは、家集が両系統に分岐する以前に収録されていたと思われる日記と重複する歌、すなわち次の図の祖本



の部分に番号をあげた歌の、紫式部日記との関係である。清水氏や菅野氏は、これらも紫式部日記から採られたと考えておられるようであるが、はたしてそうであろうか。両氏のあげておられる根拠は、紙数の都合で省略するが、十分説得的とはいえないと思う。そこで、問題の歌の、家集の詞書と日記の該当部分の文章を比較対照して、家集の拠った資料は何であったのか、現存の紫式部日記とどのような関係にあるものなのか、を検討してみたい。

(一)

私の結論を先にいえば、日記→家集の直接関係は存在せず、次

紫式部集と紫式部日記

のようになった。

日々の備忘録 → 日記
祖本の日記の歌

論を進める都合で、問題の歌を次の如く、五歌群に分けて、その論拠を述べる。

- I 77 「女郎花」 78 「白露は」
- II 87 「めづらしき」 ~ 90 「葦田鶴の」
- III 100 「多かりし」
- IV 115 「菊の露」 ~ 119 「打ちばらふ」
- V 69 「影見ても」 70 「独り居て」

家集^⑥ (I)

朝霧のをかしきほどに、おまへ
の花ども色々1に乱れたる中に女
郎花いとさかりなるを、殿御覧
じて、一枝折らせさせ給ひて、
几帳のかみより、
「これ、ただにかへすな」とて、
たまはせたり。
女郎花盛りの色を見るからに露

日記^⑦

渡殿の戸ぐちの局に見いだせ
ば、ほのうち霧りたる朝の露
もまた落ちぬに、殿ありかせ
給ひて、御隨身召して遣水は
らはせ給ふ。1橘1の南なる女郎
花のいみじうさかりなるを、
一枝折らせ給ひて、几帳のか
みよりさしのぞかせ給へり。

の分きける身こそ知らるれと書
きつけたるを、いと疾く³
白露は分きてもをかじ 女郎花
心からにや色の染むらむ

御さまのいとはづかしげなる
に、わが朝がほの思ひしらる
れば、「これおそくてはわろ
からむ」とのたまはするにこ
とつけて、硯のもとにより
ぬ。

(歌)

³「あな疾」とはほゑみて、硯
召しいづ。

(歌)

現存日記から家集の詞書が出たのではないと思われるのが、傍線部123である。

1 女郎花は、家集によると、御前に種々の花が咲き乱れている内
の一種の花にすぎない。だが、日記によると、主従の風雅の行為
の中心として、ただ一種、選択されて登場してくる。他の花は一
切関係ない。

2 道長は、家集では、女郎花を授けるについて返歌を要求したた
けであるが、日記では、歌を詠むの言うまでもないこととし
て、更に速さを要求している。

3 日記によると、道長は、式部の詠作の速さを誉めることを通し

て、式部をも操れる教養人として描かれるが、家集は道長の返歌
が疾かったと事実を記すだけである。

1については、他の花を消去して女郎花にのみ読者の注意を集中す
る配慮をしている日記の方が、風雅の場面を伝える文章として、洗
練度が高いといえる。この日記から家集の詞書を作ったものなら、
なぜ、わざわざ文章を粗雑にするような、他の花を捏造するであろ
うか。家集詞書は日記から生まれなかったとみるのが妥当である。
2については、即妙を重じる風雅の行為としては、速度を要求され
たとする日記の方が緊張が盛りあがり、よく練られた文章というべ
きである。もし、日記↓集家ならば、道長の言葉を一歩後退した
ものに書き変えた理由がわからない。3についても、日記の要約が
「いと疾く」と事実を記すだけの表現に逆戻りしなければならぬ
理由がわからない。以上の三点は、家集の詞書が、現存紫式部日記
から直接取り出されたものではなく、紫式部日記の文章に比べて、
推敲を加えられる程度の遙に少なかった資料によっていることを示
しているとみるべきである。

そのような資料として可能なものは、次の二つが挙げられる。

1 異本系紫式部日記

2 宮仕え中の文反故又はメモ類で、備忘録ともいえるもの。日

記の資料にもなっていると思われるもの。

1の場合ならば、書誌学的に別系統というのではなく、成立的に、例えば初稿本というように、異なった系統の本が考えられる。この時、1と2の区別をつけるのは、日記の基本的な性格に照らして、家集の詞書が異本にもせよ日記として許容できるものかどうかという点にあると思うので、次にそれを論じる。

(2)

柴式部日記を貫いている一特色に、式部の栄華に対する姿勢がある。主家の栄華を賛美しながらも、目を我身に転じれば「身の憂さに固執し、栄華とは無縁の自己を追求してゆく、と、一般にいわれるこの性格に、家集の詞書を照らしてみる。

家集 IV

里に出でて大納言の君文たまへるついでに 浮寝せし水の上のみ恋しくて鴨の上毛にさへぞおとらぬ返し

日記

c ただ、えさらずうち語らひ、すこしも心とめて思ふ、こまやかにものをいひ通ふ、さしあたりておのづからむつび語らふ人ばかり、すこしなつかしく思ふぞ、ものはかなきや。d 大納言の君の、夜々は御前にいと近うふし給ひつつ、物語し給ひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か。d'

贈歌 省略
返歌 省略

柴式部集と柴式部日記

日記の引用部分は里下りの条だが、その展開を、引用部分以前からみてみると、

a 寡居時代、風雅の生活に徹し、広範囲に交友関係を保ち、物語を交換しあっていた。

b 出仕したため、自と気が引け、旧来の交友も途絶え、一段と孤独が増した。物語にも感動しなくなった。(a・b引用部以前)

c 人生の様相が変わり、住居も落着かず、孤独にひたる。一方では、宮仕えで得たわずかな交友へ希望をつなごうとしている。

d 具体的に大納言君との交友をあげ、その贈答を示す。(c・d引用部分)

となる。a・b・c・dで、過去の生活と友情の喪失は自己の出仕のためであったと回想し、その喪失を半ば締めつつも締め切れず、他ならぬ出仕で得た仲間への親しみを吐露しているが、c'dで、そんな自己を「ものはかなきや」「なほ世にしたがひぬる心か」と批判する目を働かさずにはいられないのである。出仕の晴れがましさの裏で、出仕と自己の関わりを執拗にみつめる姿勢、二転三転する心理は特色的である。締観の奥から絞り出される友情への期待、やむにやまれぬ他者との関わりへの願望、その願望に流されず思索の世界へ立ち返る強靱な精神とが拮抗して、式部という人の在り方を示している。このような展開の中では、「浮寝せし」を式部からの積

極的な贈歌と理解するのが当然であろう。出仕嫌悪、孤独、締観、だからといって冷く心を閉せなかった式部の在り方に即するのである。家集のように「文たまへるついで」の返事では、歌の礼儀の側面が目立って、この文学的效果は破壊されてしまう。「紫式部日記」に、大納言君が便りをよこしたという記事、又はそれを暗示する文があったはずはないのである。そのような文をもった記録は、紫式部日記とはよべないであろう。これらの歌の入集者の問題は一応別にして、やはり家集は、文学的操作を施す前の、日常茶飯の事実を記録している。従って備忘録・日記の資料段階の記事によっているか、又は記事そのものとみななければならないといえる。このような資料の存在は、現存していなくても、当然認められるべきであろう。

(3)

(2)では日記に貰われている式部の在り方の記録という面から検討したのだが、(3)では、いわゆる「日記的部分」を通して検討してみたい。この性格については、既に原田敦子氏が、日記は、晴儀の記録としての始発を持ち、素材の取捨選択においては「出産・育児に直接関係する記事を落し、かわって盛大な宴のさまや善美を尽した用意支度や、あるいは数々の行事に競って仕奉る貴族の姿などの叙述に大きなウエイトをおいている。」と指摘されている^⑧。次の歌を、この性格からみると、どうであろうか。

家集 II

日記

又の夜、月の隈 なきに、若人た ち舟に乗りて、 遊ぶを見やる。 中島の松の根に さしめぐるほど、 をかしく見ゆれば、 曇りなく千歳に 澄めるれの面に 宿れる月のかげ ものどけし	またの夜、月いとおもしろく、ころさへか きに わかき人は舟にのりて遊ぶ。色々なる をりよりも おなじさまにさうぞきたるやう だい、髪のはど、くもりなく見ゆ（舟上の人 々の様子）かたへはすべりとどまりて、さす がにうらやましくやあらむ、外見いだしつ みたり。いと白き庭に月の光あひたるやうだ いかたちもをかしまきやうなる。 （歌はなし）
--	---

日記には歌がないが、現存日記の脱落とするのは当たらないだろう^⑨。舟上の若人から、乗舟しなかった若人へ、そして庭全体へと目を転じ、場面を転換する構成は緊密である。この構成の途中に、式部の気持を詠んだ歌が入りこんだら、文章としては混乱の感を免れない。また歌も、素材、主題共に、前夜の「めづらしき光さしそふ」と大差ないものが重複してしまう。文章の続き具合から、傍点部と歌は紫式部日記のものではないと思われる。

さらに、日記の式部自身の歌の扱い方を、原田氏の指摘される性格に照らして検討してみたのだが、結論を先に述べると、この歌は、日記にあったものとするには、扱い方が中途半端なのである。

式部の歌を、賀歌及び道長や倫子との贈答という公的性格のものとして、独詠や女房仲間との贈答という私的性格のものに分けると、

前者の場合、原田氏が、行事に奉仕する貴族を描く、といわれるように、式部自身についても、産養や五十日の儀に奉仕する自己の位置を明らかにし、その自己に詠歌させている。また道長や倫子を賛美する自己を描いて、その自己に詠歌させているのである。もし、

この歌が誰かに要請されて詠んだもので公的な価値を持つものならば、ある行事、または記録するに価値ある場面を描き、その一環としての自己を客観的に定め、その自己に詠歌させるという方法をとるだろう。ところで、一次資料^⑩によっても、当夜式部が参加すべき行事があったわけでもなく、これはという事件があったわけでもない。「曇りなく」が行事の一環として、あるいは公的に記録する価値ある歌として詠まれた可能性はないようである。また、家集によってみる限り、詠作動機は楽しげな若人達に共鳴して、思わず心情を吐露したと思われる。原田氏の指摘される性格、公的な歌の扱い方の態度からみて、賀歌にもせよ自己の生の感情の詠歌よりも、御産に奉仕するため白一色の装束の若人を美的に描く方が、紫式部日

記にふさわしいのである。また、私的詠歌の扱い方をみても、自己の内面告白の一部として、華麗な行事記録の間に、知的でしみじみとした雰囲気^⑪の述べにつつまれて記録されているのである。まずまず、産養の行事記録に私的詠歌が入る余地はないといえる。

以上のことから、家集の歌と詞書を書きつけた記録は、もはや「紫式部日記」ではなくて⑫の結論と同じように、宮仕えの備忘録で日記の資料という方が妥当ではあるまいか。

(4)

家集 II

日記

宮の御産養、五日の夜、月の光さへことに限なき水の上の橋に、

上達部、座を立みて、御橋の上にもみり給ふ。……歌どもあり。「女房さらづき」などあるをり、いかがはいふべきなど、くらぐら思ひころみる。

上達部、殿より

(歌)

はじめたてまつりて、酔ひ乱れ
ののしりたまふ
さか月のおりに
さしいづ。

四条の大納言にさしいでむほど、……ことおほくて、夜いたうふけぬればにや、とりわきてもささでまかで給ふ。祿ども、……

(歌省略)

この歌では次の二点が論拠にあげられる。

- ① 日記の「御橋の上」は、萩谷氏の考証によると、「橋廊の上に設けられた別席である。海深の上にかかり、南庭に臨んで、遊宴の中心となるべき場所」で、氏の復元図によれば寝殿と東対を結ぶ南側の橋廊である。家集の「水の上の橋」はこれと同一だが、日記の五夜の記事に「水の上の橋」という表現はない^④。現存日記の他の記事にもこの橋をさすと思われる橋が三箇所みえるが、いずれも「水の上の」とはっていない。精読すれば遣水の上にかけられた橋だと想像はつくだろうが、歌の内容から判断して、特に「水の上の橋」という表現をもって説明しなければならぬものは何もない。はたして家集は日記に由来するものだろうかと疑うゆえんである。
- ② また、同夜の記事は、行事の展開とそれに奉仕する人々の姿を再現してゆくが、この展開の中で、月は、人や事物を巨視的な位置から照らす役割を担っている。

。十五日の月くもりなくおもしろきに、池のみぎは近う、かかり火どもを……………

。夜ふくるままに、月のくまなきに、采女、水司、御髪あげども殿司、掃司の女官、顔も知らぬをり。……………

同夜の月光の記事は右の二箇所だが、これらを含めて皇子誕生の記事における月光は、慶びに沸く土御門邸を鳥瞰的に浮かびあがら

せる役割、いわば舞台照明の役割を果たしている。そして、土御門邸で喜びあう人間、いわば舞台の上からは、慶事に加えてさらにめでたさを増すものとして、月光がとらえられている。ところで、家集の「月の光さへことに限なき」とは、他に十分照明があつて、加えて月光マデモ。という意味ではなく、当然、皇子誕生の慶びに加えて月光マデモの意味であるが、日記の月光の構造がすでに述べたようなのであるから、今さら橋の形容にその発想を繰り返せば、二度手間でもあり、日記全体の統一をはかるといふ点から不都合である。

①と②を合せて考えるに、家集の詞書は、紫式部日記の如く練り上げた文章の要約ではなく、むしろ、日記の表現を獲得する以前の十五日の月光に照らされた橋上の座、殿や上達部、下を流れる水の輝きなどの一時的な美の印象の記録、すなわち備忘録段階の表現だと思ふのである。

なお、この詞書には「さしいづ」が日記の事実と矛盾するという問題がある。しかしこの点は、家集のこの詠歌が日記に由来しないとすることを否定しない。むしろ日記に由来するものならば、世に知れ渡った日記の事実と反対に要約するのではなく、同じ意味に要約するとみる方が自然ではないか。おそらくこの歌は、萩谷氏が推測されるように、詠草として提出され、皇子誕生当時は詠草提出を

もって、当座で詠唱したと同然に扱われていたと思われる。それ故式部も、備忘録の段階では「さしいづ」と書き留めたのであろう。

日記に詳しい事情を記録したのは、飽くまで事実^①に忠実であろうとしたことや、皇子誕生の行事記録を第一義の目的としながらも、その晴儀と自己の関わりに目を向け、書き留めざるを得なかった式部の姿勢によるものと考えるのである。

また、これと同様、日記では捨てられている日常生活的記録の跡とみられるのが、89「いかにいかか」の詞書である。

御五十日の夜、殿の「歌詠め」と、のたまはずれば、ひげしてありけれど

傍線部は流布本にはないが、式部の心情表現なので、古本系筆者の加筆ではなく、元来からあったものとみられるのだが、このままで式部が誰に対してなぜ卑下していたか判然としない。一見、賀歌献詠を命じられた式部が自分の任には重すぎると謙虚な態度をとっていたと解せそうである。しかし、使用人たる者は主人に賀歌を献上するのは役目であり、これでは式部が使用人の義務を命じられて卑下していたことになり道理にあわない。見えすいた謙辞をいう前に、ない智恵を絞ってでも詠歌するべきところである。日記の伝えるその間の事情を調べると「いとわびしく恐ろしければ聞こゆ」と、献詠に積極的でなかったことがわかるが、それは、儀式も終了し、

酒宴が荒れ模様になり、道長も酔払ってからんで歌を要求しているので、すみやかに詠出する気持になれなかったためである。これら、時と場の不完全に対する不満は「卑下す」の表現に該当する内容ではない。やはり、直接表現されている事の他に、何かに卑下していたのである。推測するに、道長は宰相の君と式部の二人を捕えて、一首詠出せよと迫ったのだから、どちらが詠歌してもよいはずである。宰相の君は上臈女房であり、日記によると式部は尊敬の念をもって交際していたようである。また勅撰歌人であり、式部集は彼女との贈答を載せているが、その歌才を式部は評価していたと思われる。当時は、人間関係の微細な点まで厳格であるから、式部の家庭的教師的な地位や評判の才能からして、結果的には彼女が詠出するのがよいとしても、二人のうち誰とも指名もないのに、それではとばかりに、宰相の君を無視して詠めなかったはずである。「私より宰相の君あなた」と卑下したことは十分考えられる。この配慮はあまりにも生活的であり、日記からは捨てられたが、事実を記録する段階の備忘録なら書かれていたとしても不思議ではない。しかし、家集の様な書き方では、日記を参照してみても、事情は明確ではなく、なお読者の想像にまかされることになる。定家本系に「ひげしてありけれど」がないのも、事情が曖昧なので、編者が、不必要として故意に省略してしまったか、またその曖昧さのために、伝来

の過程で、自然脱落がおきやすかったためと思われる。

(5)

家集 Ⅲ

日記

侍従宰相の五節の局、宮の御前いとけ近きに

侍従の宰相の五節局、宮の御前のただ見わたすばかりなり。……「かの女御の御かたに

弘徽殿の右京が

左京馬といふ人なむ。いと馴れてまじりたる」

一夜しるきさま

と宰相の中將むかし見知りて語り給ふを、

にてありし事な

「一夜かのかひつくるひにてみたりし、ひん

ど、人々言ひ立

りしを、物のよすがありて伝へ聞きたる人々、

てて、日蔭をや

「をかしようもありけるらな」といひつつ、い

る。さしまぎら

ざ、知らず顔にはあらじ、むかし心にくだち

はすべき扇など

て見ならしけむ内わたりを、かかるさまにて

添へて

やは出で立つべき。しのぶと思ふらむを、あ

(歌省略)

らはさむの心にて、……

家集の説明によると、実成の五節の局に弘徽殿女御付きの女房左京がいて、ある夜目立ったので、人々がこれを非難して皮肉の歌を贈ったとわかるだけである。これだけでは、当時の社会通念で、女御付き女房が、宮廷儀礼に奉仕する舞姫の控え所などについて、しかも目立つなどとはよくないことだとまでは理解できるであろうが、日

記にいうように、介添役という落魄した姿を曝しているとはわかわない。日記傍線部によれば、

。左京は、既に宮仕えを退いていること(ハ)

。舞姫の陪従に転落して再び内裏にあらわれたこと(ロ)

。その無神経さが非難されていること(イ・ハ)

が明白である。日記から家集にとられたものならば、この事態が読者にわかるように書くはずであろう。日記のこの部分を参照している栄華物語は、「かの弘徽檢の女御の御方の女房なん、かしづきにてあるといふ事をほのぎゝて」と、非難の根拠を明確に示している。この根拠は、日記を知る者には書き落とせない点のはずである。また、日記があまりに嫌味がすぎたので臍化したかとも考えられるが、その可能性はあるまい。なぜなら、家集成立の正確な年代は不明だが、少将没後という点は動かないので、日記成立後であることは間違いない。であるから、実成の人選失敗事件は他ならぬ紫式部日記によって、天下の醜聞になっており、この歌はその中核なのである。今さら、この歌の成立事情を臍化しようにも、日記の印象に圧倒されて、手遅れなのはいうまでもない。やはりこの歌も、I・II・IVの歌群同様、日記成立以前の、改めて第三者に理解できるように状況説明を書く必要のない、備忘録であるための曖昧さを残した資料によっていると思われる。

なお、この歌が後拾遺集に作者「読人しらず」として入っていることから、これを式部集成立と関係づけて、後拾遺集の編者が手にした式部集にこの歌がなく、後人によって増補されたとする説がある^④。紙数の都合で論証は省略するが、後拾遺集の編者は参照した資料の詞書に忠実であると思われる、式部の歌の著しい相違からみて、後拾遺集は紫式部集から採りもしなかったし、参照もしなかったと思われる。従って、日記と家集の関係を論じる論点にはならない。

(6)

該当する歌で、直接考証の対象にしなかった歌が、以下の五首であるが、これまでの論を否定するものではない。

IV 115 「菊の露」〜117 「ことわりの」

推定資料から家集にとられているとする積極的根拠には欠けるのだが、こだけ紫式部日記と家集の直接関係を認めるにはさらに根拠がない。また詞書も、備忘録風の文章とみてさしつかえないようである。従って、この三首も他の歌に準じるものとみたい。

V 69 「影みても」70 「独り居て」

日記の本文がないので、他の歌群と同列に論じられないが、日記によったとみられる定家本系詞書と、古本系のそれを比較するとやはり次のような箇所がでてくる。

定家本系	古本系
やうく明け行くほどに、渡殿に來 ^①	土御門院にて、やり水の
て、局の下より出づる水を、高欄を ^②	うへなるわた殿のすのこ
おさへて、しばし見ゐたれば、空の	に居て、かうらんにおし ^②
気色春秋の霞にも霧にも勞らぬころ	かかりて見るに
ほひなり。……………	

①日記からとられているだろう定家本系には「すのこ」の語がない。高欄をおさえているのだから、簀子に居るのは自明のこと。日記では簡潔にするため省略したものでしょう。もし、日記↓古本系詞書なら、不要の「すのこ」を補ったことになるが、そのようなことはありえないであろう。

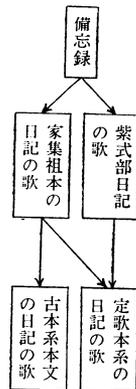
②日記↓家集ならば、「おさへて」を「おしかかりて」に変える理由がわからない。「おしかかりて」は、「影みても憂きわが涙」と水を見下して物思いに耽る式部の姿勢にふさわしく、「おさへて」は、足下の水も含めて庭全体を視野に入れる姿勢にふさわしく、日記にはよりよいといえる。古本系がメモ段階で、日記創作段階で「おさへて」に書き変えたと置えられる。

よってこれら五首も、(1)から(5)に考察した歌同様、備忘録風の資料によっていると考える。

(三)

以上から、私は、家集中、日記と重複する歌で、定家本系に分岐する以前から収められていたと推定される歌は、日記から採ったのではなく、日記の資料にもなった文反故、備忘録の類から採ったとの結論を得た。これらの歌を誰が収録したかの問題は、別の機会に論じたいが、おそらく別人であろうと思う。なぜなら、ある創造意図に基いて家集を編纂しようとする時、世に流布している日記の歌、すなわち多くを語り過ぎる歌はできるだけ採らないのが普通ではないだろうか。散文を駆使し、歌をその一端に組み込んで形成した日記の世界と、歌だけとり出して最低限必要な詞書をつけるだけの家集とでは、その印象の強さは比較にはならない。家集を読みながら日記の世界を想像することになってしまふのであろう。注意深く歌を精撰している式部がそのような愚を犯すであろうか。やむを得ず採ることもあろうが、その場合、細心の注意を払うはずである。しかし、これまでに検討した歌には、そのような配慮はなされていまいようで、息の抜けた、日記の二番煎じの感がある。おそらく、別人が、式部の残した文反故から収録したものと思われるのである。

なお、私の論考の結果を図示すると、次のようになる。



註

- ① 『紫式部集の編者』・関西大学『国文学』第46号。
- ② 『紫式部集の成立』——その構造に関する考察を中心として、『同志社国文学』9号。
- ③ 歌番号は、以下すべて、南波浩先生の校定の『紫式部集』岩波文庫による。
- ④ 菅野美恵子氏 注②に同じ。
- ⑤ 「紫式部集の復元とその恋愛歌」・『国文学』昭40・2 引用の便から「」を『』に改めた。氏が一類本といわれるのは定家本系のことであり、二類本といわれるのは古本系のことである。
- ⑥ 底本は、南波浩先生の『紫式部集』岩波文庫による。
- ⑦ 日記の引用は、以下すべて、日本古典文学大系本による。校異は、池田亀鑑氏『紫式部日記』を参照した。
- ⑧ すでに多くの人によって論じられているが、私が特によった

のは、秋山虔氏『源氏物語の世界』、原田敦子氏「紫式部日記における歌の場面について」・『同志社国文学』8号、の論である。

⑨ 「紫式部日記の始発——道長家栄華の記録——」・『国文学攷』

昭46。傍点は筆者

⑩ 岡 一男氏『源氏物語の基礎的研究』

⑪ 『御堂閔白記』『権記』

⑫ 萩谷 朴氏『紫式部日記全注釈』角川書店。

⑬ 校異、異同なし。

⑭ 注⑫に同じ。

⑮ 。後拾遺集

赤染、匡衡におくれてのち五月五日よみてつかはしける

美作三位

582 墨染の袂はいとゞこひちにて菖艸の草のねやしげるらむ

。玉葉集

おなじ院（後一条院）の御事に世をそむきてよめる 従

三位藤原典子

2353 後れじと思ふ心にそむけども此世にとまる程ぞかなしき

⑯ 家集の諸本すべて右京だが、紫式部日記、後拾遺集、栄華物語により、左京の誤字であるのは明白。また、日記に「左京馬」

紫式部集と紫式部日記

とある「むま」はやはり衍字であろう。また左京と馬と二人いるとも考えられないことである。

⑰ 『栄華物語』日本古典文学文系・岩波書店 上275巻頁。

⑱ 菅野美恵子氏 注②に同じ。